貝塚の自然 3　木島について

川村 甚吉（貝塚市立自然遊学館）

本市に「木島」という地名があります。樹木が覆い茂って「木の島」に見えるところから名づけられたと市史に記載されています。さらに市史は、「行基遺訓によれば、行基が菅原寺を本寺として 49 院を建てたとき橘諸兄の封地泉郡木島の杣山について良材を乞うて用材としたことが記されている。以って、泉郡杣山の欝蒼たる樹林をなしていたことが明らかであり、木島およびその奥地が泉杣と称されたことを推知せしめるのである。」とありますから、木島が木の島であることを断定は避けてはいるもののほぼ肯定的にのべています。その木島の木が、行基が指導してたくさんの寺を建てる用材となったのでしょう。そのことを裏付ける万葉集の 2 首を引用します。

「宮木引く　いづみの杣に　立つ民の　やむときもなく　恋わたるかも」

「世の中は　和泉杣木　とる民の　ふるきをさらに　引きおこさなん」

宮木とは文字通り神社仏閣の建築材料のことでしょう。聖武天皇(710～740 年)の頃、都や地方にたくさんの寺院が建立されました。その建築材料にいづみの杣が使われたと記されています。いづみの杣とは木島のこととととらえることができます。その木島の杣木を切るためにたくさんの人々が行き来したとありますから、盛んに宮木が作られたことでしょう。

それではなぜ木島の木が使われたのでしょうか。理由として、大きな寺院建立には巨木が必要であり、木島の木はその条件を満たすほどの立派なものであったこと、地理的に都の近くであったこと、神前の船息(ふなやす)という近隣にはない立派な港があったことなどが考えられます。

和泉の国日根郡近木の里 神前の船息から出航し、大阪湾を通り、木津川の摂津の国兎原郡宇治の里 大和田船息からは陸送です。修羅で奈良に運ばれたのでしょうか。奈良の有名寺院が貝塚産の材木が使われていたとなりますと何かしら嬉しくなってきます。さらにその材が現存しているとなるとなおさらですが、残念ながら、ほとんどの建築物は建て直されておりますのでその可能性はほとんどないでしょう。

その木島が木島郷となり、地頭が置かれたりしました。さらに、それから荘園の意味合いを持つ木島庄となったのは 1250 年を前後らしいです。木の島が木を切り、開墾し、郷を成すのにそれほど時間がかかっていません。貝塚の奈良、平安時代の先輩たちも働き者で、知恵者であったからでしょう。

今、まっさらな東山地区から木島地区を眺望しながら、次世代はどういう姿に変身していくのか空想の世界に遊びながら、筆をおくことにしました。

（東山から木島を望む）

（水間公園から木島を望む）

（高井城址）

（千石荘跡）